

桜本の子どもたちが生きる社会とサードプレイスの役割  
—川崎市ふれあい館の学習サポートを通じたフィールドワークから—

法学部政治学科 4 年 C 組  
塩原良和研究会 8 期  
学籍番号 31455575  
佐久間 響

目次

1. はじめに
2. 桜本の地域的背景と川崎市ふれあい館の概要
  - 2-1. 在日外国人について
  - 2-2. 生活保護について
3. 桜本の子どもたちが抱える困難
  - 3-1. 勉学面での資本の不足
  - 3-2. ロールモデルの影響
  - 3-3. 進路決定要因
  - 3-4. 「良からぬこと」へのアクセシビリティ
  - 3-5. 結論
4. ふれあい館は桜本の貧困をどう克服しているのか
  - 4-1. 学習支援としての役割
  - 4-2. サードプレイスとしての役割
5. サードプレイスの重要性
  - 5-1. サードプレイスとしてのヒップホップ文化
  - 5-2. サードプレイスが重要な「居場所」である理由
  - 5-3. サードプレイスのジレンマ
  - 5-4. 出会いの場としてのサードプレイス
  - 5-5. 「第2のセカンドプレイス」という可能性
6. おわりに
7. 巻末資料—フィールドノート「川崎市ふれあい館 学習サポート」を通じて

## 1. はじめに

2015年2月20日、神奈川県川崎市川崎区港町の多摩川河川敷で中学1年生の上村遼太さん（当時13歳）が遺体で発見された。事件にかかわった疑いがあるとして、殺人の疑いで逮捕されたのは、リーダー格の当時18歳の少年と、当時17歳の少年2人を合わせた3人であった。

逮捕された少年たちの残忍さばかりが報道された事件であったが、この事件の責任を個人のレベルでは問うことはあまりにも短絡的である。この事件に関わった少年たちは皆、この地域特有の複雑なバックグラウンドを持っているからだ。

この地域には在日韓国・朝鮮人を中心に外国ルーツを持つ人々が多く住んでおり、ほかにも、フィリピンパブで働く女性の子どもや、ひとり親の家庭の子ども、近くの京浜工業地帯で生計を立てながらも生活保護を受けている家庭の子どもが多く暮らしている。その背景や具体的なデータに関しては後の章で紹介していくが、なかにはその特異な環境ゆえに苦しみ、心安らぐ「居場所」を求めている存在がいる現状がある。

2016年4月26日～2017年12月14日現在まで、私は、社会福祉法人青丘社が運営する社会福祉法人「川崎市ふれあい館」（以下、「ふれあい館」と同義）での学習サポートに、支援者として参加してきた。ここで出会った中高生たちもまた、ほとんどがひとり親の貧困世帯である。彼らが望むのは必ずしも学習支援とは限らない。私は、彼らのどこか投げやりな将来の展望にある種のカルチャーショックを覚えた。ふれあい館では、彼らが将来に対して希望をもてるような精神的サポートも重視しており、やり場のない思いの受け皿として大切な役割を担っている。

新自由主義がますます優勢となり、グローバル化に伴う多文化化を続ける現代の日本社会において、こうした社会的マイノリティの存在は一層数を増やし、また複雑化していくことが予想される。多面的で重層的な関係の中に生きざるをえなくなっていく中で、心安らぐ居場所の必要性は今後さらに増していく。このような居場所として、アメリカの社会学者レイ・オルデンバーグが提唱した「サードプレイス」と呼ばれる場所の重要性について考えたい。「サードプレイスとは、家庭と仕事の領域を超えた個々人の、定期的で自発的でインフォーマルな、お楽しみの集いのために場を提供する、さまざまな公共の場所の総称である」（オルデンバーグ 2013：59）。

様々な価値観との出会いの場。行き詰った時にふと立ち止まれる時間。つらい現実からいったん身を置ける避難所。それは、社会的マイノリティと定義づけられる者にだけ必要とされるものではないと私は考える。この社会におけるあらゆる人が、心安らぐ居場所を求めている「当事者」なのかもしれない。最後には私自身を観察対象、当事者として捉え直し、私にとってのふれあい館の存在意義の考察を試みる。

## 2. 桜本の地域的背景と川崎市ふれあい館の概要

JR 川崎駅で降車。改札口を出て長いエスカレーターを下り、直進した先で市営バスに乗車。30分弱で到着する四ツ角駅で降車。入り組んだ道を通って人気のない商店街の入り口に立つ。その商店街に入る手前、ガソリンスタンドの脇で右折。右側には、新築のきれいなマンションや一軒家。左側には、築数十年は経過していると思われる家々。一つの道路を隔てて対照的な光景が広がる路地を突っ切ると、左手に現れるのが「川崎市ふれあい館」。またの名を、「桜本子ども文化センター」である。

ガラスのドアを開くとまず、「うるせえ!」「バカ」などという言葉が耳に飛び込んできた。大声でしゃべっては走り回る女の子たち。圧倒されながら私たち学生は二階に案内され、学習指導が行われている広い部屋に足を踏み入れた。組み立て式の机を二台合わせ、4つの椅子が囲んでいる。それが8つほど。端っこで目深にフードを被り、誰も寄せ付けないう雰囲気ですっとゲームをしている男の子。静かに勉強している真面目な女の子たち。座る姿勢が悪く、言葉や振る舞いに刺々しいものを感じさせるぼっちゃり目の女の子。露骨に緊張している、風貌は小学生の小柄な男の子。部屋の中を見回しただけでも、本当に様々なバックグラウンドを持つ子供たちがいることが分かる。それに対して百戦錬磨のサポーター達は、気を使って接しているというよりは、むしろ騒ぐ子供たちに軽く蹴りを入れたり、人見知りしている子をいじったりしている姿が印象的だった。

2016年4月26日。私が初めてふれあい館を訪れたのは、私が所属する社会学のゼミのフィールドワークという名目のためである。コーディネーターは鈴木健さん（以下「健さん」）と、遠原輝さん（以下「輝さん」）。学習指導を始める前にまず、健さんからふれあい館についてレクチャーを受けた。

以下、私とともにこのフィールドに赴いた友人が健さんのお話を記録しているので、本人に許可を得てそれを転載する。

ふれあい館がある地域（桜本）は在日韓国・朝鮮人の方を中心に外国にルーツを持つ人々が多く住んでいる地域です。近くに京浜工業地帯があるため、そちらでお仕事をされる方が多くいらっしゃいます。

かつては社会保障制度の整備が不十分であったことを受け、桜本では地元の人々との共生のための取り組みが早くから行われてきました。ふれあい館では特に、子どもたちの学力サポートを通して、「自分を否定せず、誇りをもって生きていけるんだよ」ということを子どもたちに感じてもらえるよう、取り組みを40年前から行っているそうです。実際にふれあい館に来ている子どもたちは、1人を除いて、生活保護を受けているようで、学習面や精神面のサポートが重要であると考えています。

ふれあい館に来ている子どもたちは十人十色です。鈴木さんは、「子どもたちが施

設に求めることは一人ひとり違う」とおっしゃっていました。勉強をしたい子、遊びたい子、お話をしたい子、それぞれです。

実際に学習スペースを見渡すと、椅子に座って仲良く話している子もいれば、大きく笑い声をあげる子や遊んでいる子もいました。中学三年生の子どもたちは、大事な時期に入ったということもあり、みな机に向かって勉強に取り組んでいました。

私たちは、子どもたちが何をしてほしいか？をよく読み取りながら子どもたちと交流していく必要があります。

勉強に関してですが、自分で教科書や問題集をもってきて勉強をやる子がいれば、なにをやっているか迷っている子もいます。量も子どもたちによってさまざまです。

ふれあい館にはテキストが多く所蔵してあるので、もしやるものがなくなったらそちらを使用してほしいということだそうです。私も実際使用しました。

また、子どもたちの勉強の進度・理解度もそれぞれなので、できる限り対応してほしいとのことでした。段階を下げたり、ちょっと考え方を変えたりするのは問題ないことで、むしろ積極的にやってほしい、というお話がありました。

また、鈴木さんは子どもたちと交流するうえでの注意を2つ挙げておりました。

① 私たちが思っているより子どもたちは繊細なこと。

鈴木さんは、見た目はとても元気で活発な子でも、ふとした発言で本意に傷をつけてしまうことがあるとおっしゃいます。言葉には配慮が必要です。

② 大人や学生に向かって「試し行動」をする子どもがいる、ということ。

「試し行動」とは、子どもたちが大人や学生に向かって言う、「こんなこと言ったら驚くんじゃないか、びっくりして慌てるんじゃないか、その反応を見てみたい」と気持のこめられた言葉です。つまり、「僕/私は、(病気などで)もう死んでしまうの」「今日、学校の先生を殴ってきた」などの言葉です。中には、本当の気持を口にしてある場合もあるそうですが、何か異変を感じたときは、すぐにコーディネーターの方に伝えてほしい、ということをおっしゃっていました(2016年4月26日)。

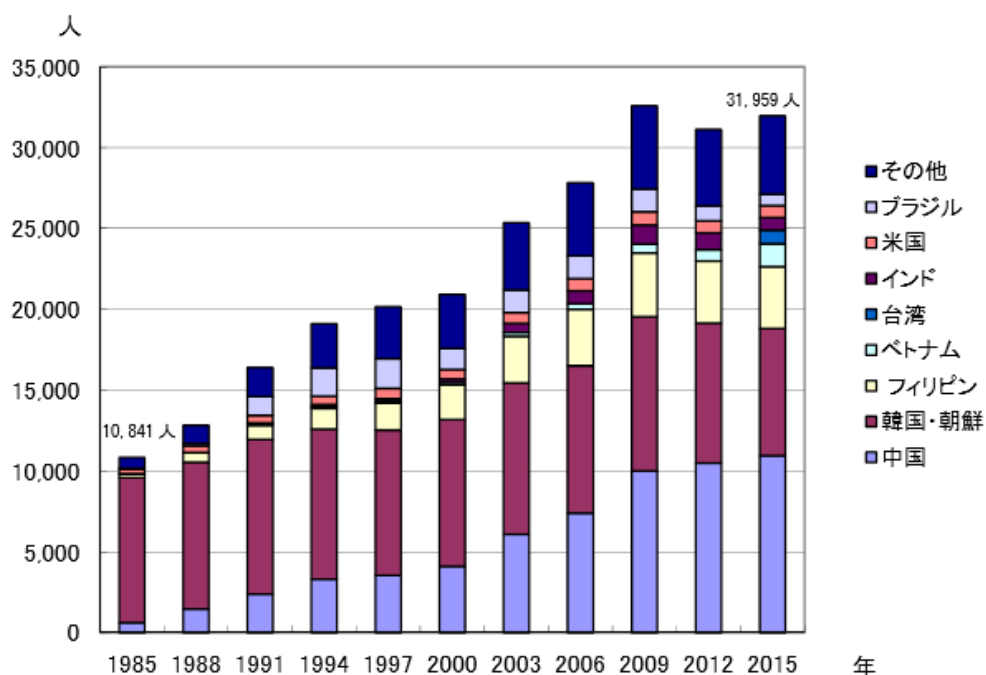
上述の健さんの言葉から分かるように、川崎市のとりわけ南部に当たる川崎区桜本という地域は、歴史的に在日外国人が多く暮らす多文化地域である。また、在日外国人が多いことと、京浜工業地帯で働く工場労働者が多かったことが深く関係し、生活保護世帯が集中していることもその特徴である。ここではまず、川崎市川崎区、中でも桜本の地域的背景について、データを参照して紹介する。

## 2-1. 在日外国人について

戦前の日本の植民地支配により、多くの韓国・朝鮮人が募集、徴用、強制などにより工場労働者として、日本を代表する京浜工業地帯である川崎市に連れてこられた。現在川崎

市に住む在日韓国・朝鮮人の多くは、その孫たちである。かつては、市内の在住外国人の多数派であった彼らも、88年の入管法改正以降、多数のニューカマーが移住してくる中で全体として出身地の多様化が進んでおり、市の外国人人口約2万人（102カ国）の内、韓国・朝鮮人の比率はついに50%を割り込んだ。ニューカマーの比率は、微増ではあるが年々高まる傾向にある。

図1 外国人住民人口の推移



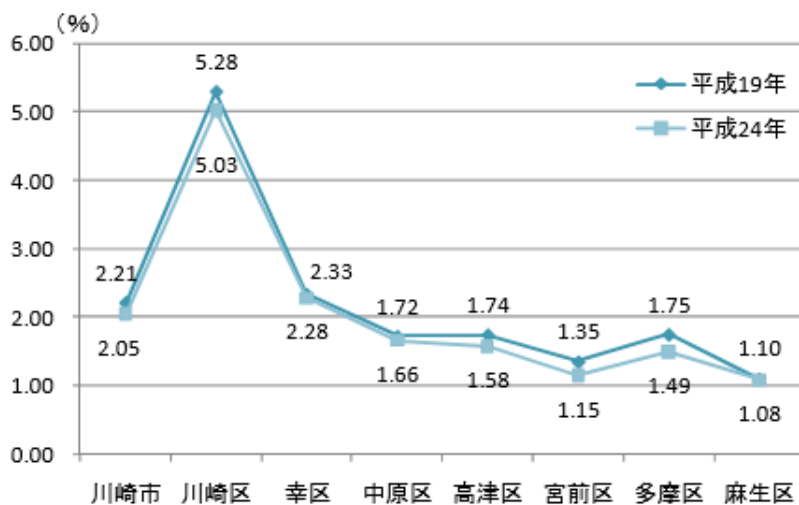
出所：『川崎市多文化共生社会推進指針』（2015），p. 4.

（外国人住民人口：住民基本台帳における外国籍の住民登録者数。日本国籍をもつ外国人市民は含まない。なお、2011年以前は統計のとり方が異なっていたため、数値の単純な比較はできない。）

資料：『川崎市外国人市民意識実態調査（インタビュー調査）報告書』（2016），p.7.

区別外国人登録人口比率の推移を見ると、川崎市全体として増えている中でも、川崎区という地域は圧倒的にその比率が高いことが分かる。

図2 区別外国人登録人口比率の推移



(注) 各年9月末日現在の外国人登録人口を、当該年度の10月1日現在の総人口で除した値である。  
 資料: 川崎市「川崎市管区別年齢別外国人登録人口」(各年9月末日)、川崎市総合企画局「川崎市年齢別人口」(各年10月1日)

(出典

[http://www.city.kawasaki.jp/450/cmsfiles/contents/0000051/51502/H250823\\_s2.pdf#search=%27%E5%8C%BA%E5%88%A5%E5%A4%96%E5%9B%BD%E4%BA%BA%E7%99%BB%E9%8C%B2%E4%BA%BA%E5%8F%A3+%E5%B7%9D%E5%B4%8E%E5%B8%82%E6%AC%A1%E4%B8%96%E4%BB%A3%E8%82%B2%E6%88%90%E6%94%AF%E6%8F%B4%27](http://www.city.kawasaki.jp/450/cmsfiles/contents/0000051/51502/H250823_s2.pdf#search=%27%E5%8C%BA%E5%88%A5%E5%A4%96%E5%9B%BD%E4%BA%BA%E7%99%BB%E9%8C%B2%E4%BA%BA%E5%8F%A3+%E5%B7%9D%E5%B4%8E%E5%B8%82%E6%AC%A1%E4%B8%96%E4%BB%A3%E8%82%B2%E6%88%90%E6%94%AF%E6%8F%B4%27))

## 2-2. 生活保護世帯について

次に生活保護世帯をはじめとする、川崎区に存在する生活が苦しい家庭の子どもたちの数の変遷や現状について統計的なデータを紹介する。

川崎市のホームページによると、川崎市全体の生活保護を受けている世帯は年々増加傾向にある。

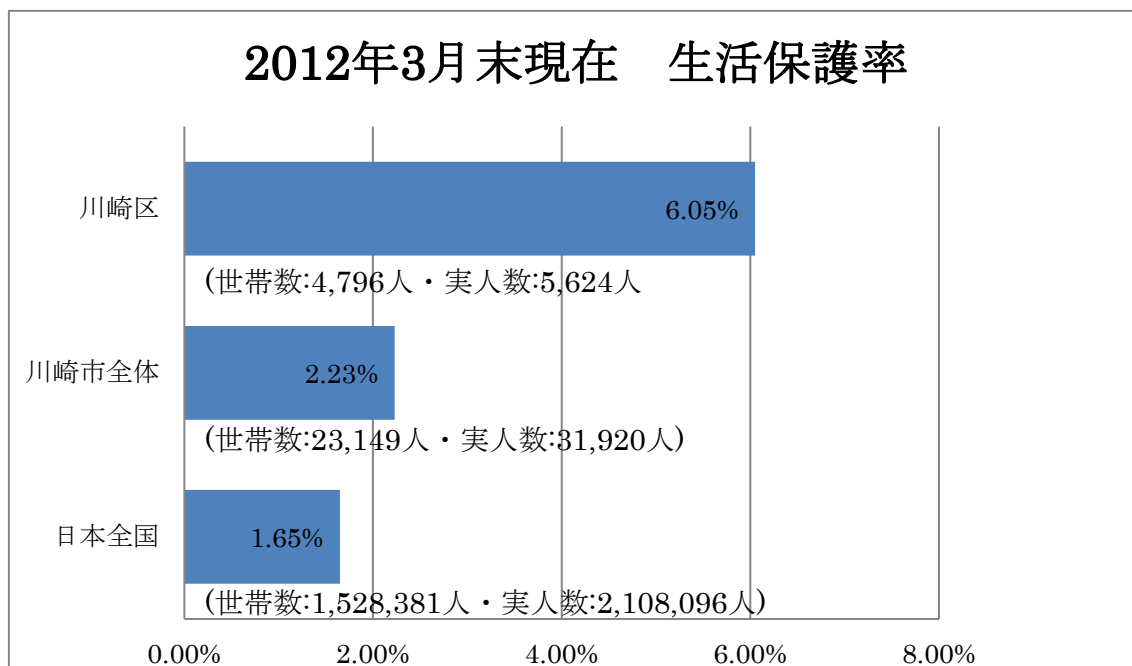
表1 被保護世帯数・人員の推移

	現に保護を受けている者	
	世帯	人員
平成17年度月平均	16,686	23,580
18	17,087	24,012
19	17,378	24,284
20	17,843	24,747
21	19,602	26,974
22	21,490	29,676
23	22,694	31,361
24	23,513	32,329

(出典 <http://www.city.kawasaki.jp/350/cmsfiles/contents/0000058/58959/452-453-454.pdf>)

「2012年時点において、全国的生活保護率は1.65%。川崎市の生活保護率は2.23%で、全国平均よりも高い。なかでも川崎区的生活保護率は6.05%と、全市平均の2.7倍である。」  
(青丘社 2012)

図 3



(出典：塩原良和・山田貴夫・仲山紘史・原千代子・金迅野,2012,『だれもが力いっぱい学べるために——青丘社「学習サポート事業」の現状と課題』,社会福祉法人青丘社,2頁)

生活保護世帯の多さについては、先ほど既述した外国人労働者の多さと結びつく部分も大きい。また、ひとり親の家庭も貧困に陥りやすい。

2014年に刊行された厚生労働省の「ひとり親家庭の支援について」という報告書によれば、日本ではひとり親家族の相対的貧困率が、およそ5割と他の先進諸国と比較しても突出して高く、その反面、ひとり親家族の生活保護の受給率は、およそ1割と、生活保護制度が貧困なひとり親家族の一部しかカバーしていないという現代の日本の状況がある(川崎市 2010)。こうした状況にあるにもかかわらず、川崎市におけるひとり親家庭数の推移をみると、平成7年から母子家庭の世帯数は上昇し続けている。

表 2 母子家庭数・父子家庭数の推移

区分	母子家庭数				父子世帯数			
	総数	子どもが1人	子どもが2人	子どもが3人以上	総数	子どもが1人	子どもが2人	子どもが3人以上
昭和55年	3694	1841	1461	392	962	495	380	87
昭和60年	4635	2236	1917	482	1099	568	431	100
平成2年	4404	2281	1767	356	1079	582	406	91
平成7年	4187	2245	1578	364	865	480	321	64
平成12年	5145	2616	1942	587	899	503	317	79
平成17年	6139	3122	2337	680	957	537	325	95

資料：総務省「国勢調査報告」

(単位：世帯)

資料：『川崎市次世代育成支援対策行動計画 川崎子ども「夢と未来」プラン（後期計画）』（2010）, p63

以上で見てきたデータからも、川崎区という地域の多くの若者たちが、特異な環境で育っていることが分かる。



### 3. 桜本の子どもたちが抱える困難

さて、川崎区の概略的な紹介が済んだところで、ここからはフィールドワークから得られた情報を参照しつつ、桜本の子どもたちが抱えている問題について考えてみる。(本章以降の分析ではフィールドノートから部分的に抜粋するが、全体像をぜひ巻末資料で読んでほしい。)

本章ではとりわけ、桜本の子どもたちがどのような社会的排除の状態にあるかを考察していく。なお、社会的排除という言葉には多様な解釈があり、批判を含めた論争もある。ここで私が意図しているのは、個人が地域ネットワークへの参加がなされていない状態という意味合いにおける社会的排除ではない。2017年12月14日のフィールドノートで紹介したマイケルのような境遇の少年を考察する際には、この意味での社会的排除を用いる意味はあるだろうが、私が主に接してきた子どもたちのようなケースでは、あまり有効性を持たないように思える(そもそも地域ネットワークに参加できていないような場合、ふれあい館という社会福祉施設にはたどりつけない)。

社会的排除は、様々な不利の複合的な経験の中に生まれているということがしばしば強調される。岩田が紹介するグラハム・ルームは、社会的排除の焦点は、従来の貧困と比較して「所得や消費から複合的不利へ」「個人や世帯の資源から地域資源へ」と、重点の置き方が変化していると指摘している。また、このような不利の複合の経験は、従来の社会問題の典型的な把握方法とは異なって、きわめて「個別的」な様相をもっており、したがって、統計的につかむというよりは、人々の人生行路の軌跡の中でしか把握しにくいということも強調されている(岩田 2008: 24-26)。むろん、本論文もその試みの一つであるわけだが、その個別性故に、社会的排除という概念を狭く限定的に定義することの限界が生じてくる。本論文ではより広く、個人がその人生で利用すべき何らかの「資本」が不足している現状として把握する。

フランスの著名な社会学者ピエール・ブルデューによる文化資本論と総称される議論では、子どもの家庭環境や居住地が、大学進学に関連していることを指摘されている。親の学歴が高いと、家庭内の「文化的豊かさ」(蔵書や美術品といった文化財や、本の読み聞かせなどの文化的経験)が資本として蓄積し、子はそれを活用した結果、勉強が良くでき、大学に行きやすい(数理社会学会 2014: 61-69)。これを日本の文脈に適用したとき、文化資本を広く捉え、両親の学歴に象徴される家族の文化的背景が子どもの成績や学歴に影響するという「文化仮説」に修正する必要性を平沢が主張した。これに加え、「経済仮説」を合わせて検討する必要性を論じている。これによれば、世帯全体の所得が高い家庭は、塾などの優勝の学校外教育を受けさせやすいので、子供の成績が高まるとともに、大学進学に伴う多額の費用の負担に耐えることができる。また、仮に成績が悪くても、入学難易度の低い大学や学力試験を課さない専門学校などへ、子どもを進学させる経済的な余裕がある

ため、単純に家計所得が高い方が高学歴を取得しやすい（平沢 2014：126-135）。

以上に挙げただけでも、個人が人生で利用すべき資本の不足が非常に多岐にわたることがわかる。その広く曖昧となってしまった不足、つまりは、桜本の子どもたちが抱えている「不利の複合の経験」というものを、フィールドワークの経験をもとにいくつかに分類してみよう。

### 3-1. 勉学面での資本の不足

まず前提として、ふれあい館に通う中学生のほとんどが生活保護を受けている貧困家庭であることから、金銭面での不利（塾に通わせられない、教材を充実させられない）と言った困難が存在することは容易に想像ができる。だが、それだけでは説明のつかない現実も一方である。個人差はあるが、学校の学習進度に追いつけていない子があまりにも多いことだ。中学3年生にして中学1年生レベルの問題に苦戦する公太、大魔神、助平。プラスとマイナスの概念にすら理解に苦しむ中学1年生の子どもたち。義務教育課程の失敗とも言えるこの状況を家庭と学校に分けて考えてみたい。ただし以下に記すことは、私自身の経験との主観的な比較でしかないことを認めておく。私は、港北ニュータウンと呼ばれる比較的所得に余裕がある層の暮らす街で育ち、私立の中高一貫の進学校に通っていた。比較的恵まれた学習環境と比較した際に、彼らに「不足している」と思われるものを列挙していく。

#### ・家庭内での理解

「あいつ（公太）は受験なめてる。悪い意味でプレッシャーを全く感じてないんだと思う。ご家族もそのへんのこと理解してないんじゃないかな。」2017年1月19日の輝さんの言葉だ。公太は、高校受験直前の時期であっても家族で食事に行くなど、受験に対する危機感といったものを見せなかった。また、家では全く勉強できないという大魔神。助平のように、長期休み期間の間、宿題を一切やらない中学生たち。その背景に、家庭内に子どもに勉強するように言い聞かせる存在がいないこと、宿題のわからないことを教えてくれる存在がいないことが想像できる。

#### ・学校内でのフォローアップ

2017年3月23日。計算問題を解く際、途中式を書かない子が多いことに気づく。「そういう風に注意してくれる人がいないんだろうね」という輝さんの考察。私個人の経験でいえば、途中式を書く習慣は、親や学校の先生、あるいは学習塾で何度も注意されて習慣づくものである。その習慣がないということは、家庭や学校内でそのような指導が十分になされていないことを想像させる。もちろん、学校教師の個人差や、学校ごとの教え方の差異はあるため、一概にこれを一般化して語ることはできない。2017年5月12日には、美玖の解き方を見て学校教師が分かりやすい学習指導をしている印象を受けた。しかし、プ

ラスマイナスの概念が理解できない中学 1 年生や、英語に苦手意識を持つ中学 3 年生の子どもたちを見たとき、その時々学習内容を十分に理解できないままに次に進んでしまう学校教育のフォローアップ体制の不十分さを感じざるを得ない。こうしたフォローアップの欠如は、義務教育課程が進むにつれて累積していき、ますます子どもたちの自信と学習意欲を削いでいく。私がふれあい館で中学 3 年生に指導した学習内容は、高校受験対策を除いてほとんどが中学 1 年生レベルの内容であった。

### 3-2. ロールモデルの影響

「母さんみたいに役所から金もらって生きる。」2017 年 4 月 25 日に健さんから聞いた(当時) 中学 3 年生の誠の発言だ。貧困がもたらす負の影響の一つとして、「ロールモデルの欠如」という議論がしばしばなされる。親は子のモデルとなるため、親自身の出世や学歴達成に対する価値観が子どもに引き継がれるというのである。その結果、親の職業階層や学歴が子に引き継がれる。逆に、親はマイナスの「モデル」ともなりうる。例えば、親自身が劣悪な職業に就いていたり、所得が低いことによって、学業や勤労に対して悲観的な考えをもつようになり、その考えが子どもにも継承される。「子ども時代に生活保護など政府からの援助を受けている世帯に育つとその「くせ」がつく」などと主張する研究者もいる。

また、地域という媒体を通したロールモデルも存在する。例えば、学校の質や近隣住民などを含めた居住地域の環境がそれにあたる。欧米のスラム地区で育つ子どもについてよく言われるのが、子どもが「ああいう大人になりたい」と思えるような大人が近所に全くいないというものである(阿部 2008 : 30-33)。

いずれにせよ、家庭内や地域に存在する「モデル」が、子どもたちの将来選択に大きな影響を及ぼすことは注目すべきである。彼らの思い描く将来像に関する発言から、彼らが身近な生活環境の中からどのような影響を受けているかをたどっていくことができるだろう。

慧：公務員 2016 年 10 月 20 日

健三：公務員、警察官 2016 年 5 月 12 日

電卓：銀行員 2016 年 5 月 12 日

公太：船大工、造船関係の仕事 2016 年 8 月 4 日、2017 年 2 月 9 日

    YouTuber 2016 年 6 月 2 日

大魔神：建設関係の力仕事 2016 年 12 月 6 日

助平：調理師 2017 年 5 月 26 日

栄太：調理師 2016 年 6 月 16 日、YouTuber 2017 年 2 月 21 日

以上に列挙したものは、主に経済的安定を求めるもの、身近な大人をモデルとしたもの、そしてメディア等を通した憧れに分類できそうだ。一つ目の例は、広く公務員という言葉

を用いた堅実派の慧や健三、(総合職と窓口業務の区別もなく)「銀行員」という将来像を描いた電卓である。彼らは仕事としてのやりがいや憧れではなく、金銭面での充実を求めていることがうかがえる。自身の家庭環境に対するある種の反面教師的な動機と決めつけるのは早計かもしれない。だが、その要素が少なからず影響していることは否定できないだろう。電卓は銀行員という職に関連して、漠然と「お金持ちになりたい」と口にしてきた。残念ながら、彼らの自己実現を後押しする情報や、大人の協力体制が十分に整っているとは言い難い。

一方、造船関係の仕事を目指す公太や、建設業に憧れを抱く大魔神は典型的に二つ目の分類で、彼らの身近なロールモデルが工場労働者であり、将来観がそれに影響されていることが伝わってくる。その将来観が、「勉強する意味がない」という感覚に結びついてしまっていることも無視できない。

YouTuber や調理士という夢も、ある種の憧れからくるもの。これに関しては、身近な大人というよりは、メディアを通じた憧れの可能性が高く、この地域に固有なロールモデルとは言い難い。平成 29 年度、ソニー生命保険株式会社による意識調査で、男子中学生のなりたい職業ランキングの 3 位に YouTuber がランクインしたことは話題になった。

図 4 中学生の将来なりたい職業ランキング

◆将来なりたい職業【複数回答形式(3つまで)】 ※中学生の回答結果を表示

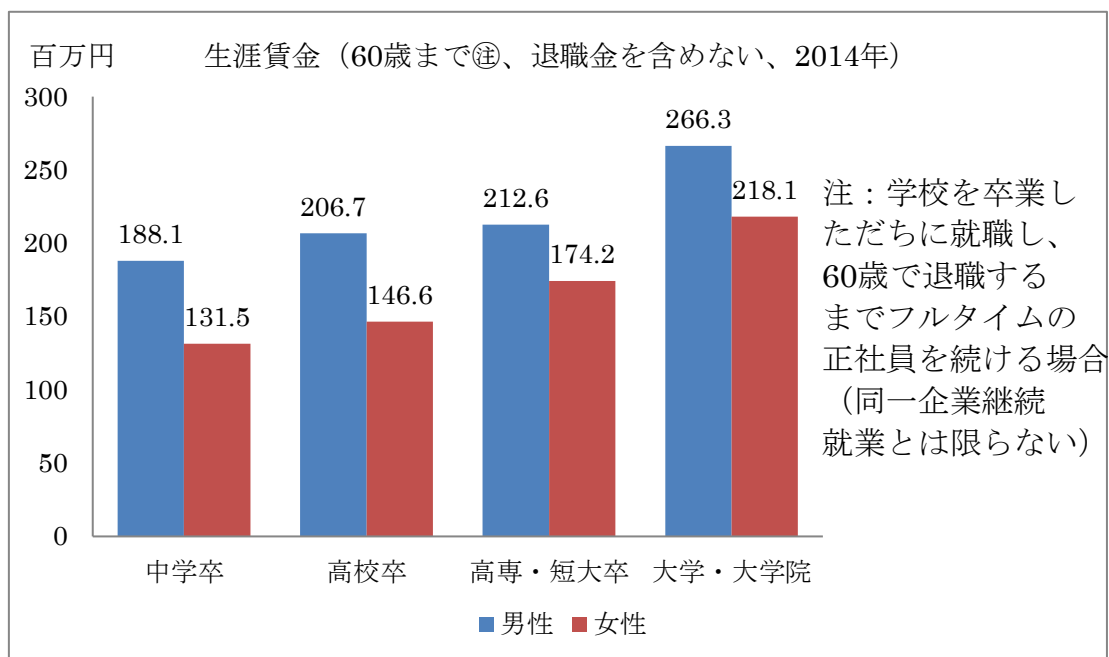
男子中学生(n=100)			女子中学生(n=100)		
		%			%
1位	ITエンジニア・プログラマー	24.0	1位	歌手・俳優・声優などの芸能人	19.0
2位	ゲームクリエイター	20.0	2位	絵を描く職業(漫画家・イラストレーター・アニメーター)	14.0
3位	YouTuberなどの動画投稿者	17.0	3位	医師	13.0
4位	プロスポーツ選手	16.0	4位	公務員	11.0
5位	ものづくりエンジニア(自動車の設計や開発など)	13.0	5位	文章を書く職業(作家・ライターなど)	10.0
6位	公務員	11.0	6位	保育士・幼稚園教諭	9.0
7位	学者・研究者	10.0	7位	教師・教員	8.0
	社長などの会社経営者・起業家	10.0		ゲームクリエイター	8.0
9位	教師・教員	9.0	9位	デザイナー(ファッション・インテリアなど)	7.0
	医師	9.0	10位	YouTuberなどの動画投稿者	6.0
				マスコミ関係(記者・TV局スタッフなど)	6.0

(出典：[http://www.sonylife.co.jp/company/news/29/nr\\_170425.html#sec6](http://www.sonylife.co.jp/company/news/29/nr_170425.html#sec6))

### 3-3. 進路決定要因

「慶應生が彼らの身近にいただけで革命的なことなんです」と健さんに言われたことがある。この発言の背景には、慶應義塾大学に通う学生というものが彼らの身近にほとんどいないというこの地域の現状がある。これも先ほど言及したようなロールモデルの影響がある。大学を卒業しなければ高収入は望めない。

図5 学歴別生涯賃金



(出典：[http://www.jil.go.jp/kokunai/statistics/kako/2016/documents/useful2016\\_21\\_p286-330.pdf](http://www.jil.go.jp/kokunai/statistics/kako/2016/documents/useful2016_21_p286-330.pdf))

平沢によれば、高卒者と比べて大卒者は、大学進学にかかる費用を勘案しても、平均的な賃金が高い。つまり、大学進学 of 客観的な経済収益性は高いと言える（平沢 2014：138-144）。しかし、実際に大学進学を望む子どもは少ない。彼らの大学や希望進路に対する言及をまとめてみよう。

2016年5月12日、電卓：大学は行きたい気持ちはあるが、そんなことよりも早く仕事して早く稼ぎたい。

2016年6月9日、公太：高校は行きたいが、大学は行かないと断言している。勉強ができないから大学には行けないと思っている。

2016年8月4日、公太：工業高校に行くこと決めた。理由は知り合いが船を修理している仕事をしていて、それをロールモデルとしたから。

2016年8月25日、慧：大学へのあこがれを口にした。「大学行きたい」といいつつも、具体的な進路として考えているような感じではなかった。「大学生」というものを相当な「勝ち組」と思っているような印象。

2016年9月1日、健三：進路に関しては専門学校を目指しているが、大学も選択肢の一つとして考えていて、「大学は楽しそう」と言ってくれた。

2016年12月6日、大魔神：建設工学科を目指す。建設関係の仕事に関心があるようだ。理由は近場で働いている人たちの姿を見て「カッコいい」「すげえ」と思ったから。

2017年1月19日、慧：「私立はなんか嫌だ。」理由を聞くと、「いや、なんか。友達いないじゃん。」なんとなく、返答に迷いを感じた。仲の良い友達が大師を目指しているからというのは大きな理由の一つのようだが、金銭的な理由もあるのかもしれない。「あいつらが大師行けるか分かんないけど。バカだからさ。」「大師からでも大学行けないわけじゃないし。」とも言っていた。

2017年1月26日、電卓：「大学は行くよ」と断言していた。ずっと前に話した時には「大学なんていけない」とか「大学行かなくても資格取れば」みたいなこと言っていたため、しばらく話さない間に何か変化があったのかもしれない。

2017年2月9日、公太：「建設科でも機械科でもどっちでもいいんだけど、造船に関わる仕事がしたいんだよね」

2017年5月26日、助平：「大学って頭良くないといけないんですよね？」

2017年5月26日、助平：中学の時は高校にすら行くつもりがなかった。学校の先生にも「お前は絶対（高校進学せずに）就職しろ」と言われていた。ただ、お兄ちゃんも高校行っているし、なんとなく高校行かないとマズイのかな？くらいの感覚で高校進学を決めた。

2017年10月5日、電卓：学校の先生から、「東京オリンピック後景気が下がって就職難になるから大学行っても仕方ない」だとか、「金銭的に大学行くのはおすすめしない」的なニュアンスのことを言われたようで、それを気にしているようだった。

2017年12月7日、将太郎：行きたい高校を尋ねたら、特に無いようで、「行けたら行きたいけど。たぶん行けない」と言っていた。「俺バカなんで」

堅実派の慧は大学進学を希望し、大師高校から進学可能な大学に関する情報を求めている。高校生の電卓と健三は迷いを垣間見せつつ大学に行きたい気持ちを見せた。しかし、それ以外のほとんどの子が、大学進学に対して消極的、あるいは大学進学を「無理」と感じていた。また、大学進学希望する子どもたちも、「大学は楽しそう」という言及にとどまっておらず、就職面を理由にする子は少なかった。こうした背景を二つの側面から考察したい。

一つ目には、先ほども出てきたロールモデルの欠如という問題。彼らを取り巻く大人や年長者の多くが大学に進学せずに就職している。分かりやすく兄の影響を受けている助平は、「お兄ちゃんが通っているから」という理由で定時高校に進学した。

また、「(自分は)バカだから」という理由で大学には行けないという子どもは非常に多くいたことも興味深い。どういうわけだか、大学は「頭の良いごく一部の人間しか入れない」という幻想が子どもたちの間にはびこっている印象を受ける。私立の進学校に通って

いた私にはそれが不思議で、私はむしろ「大学に通えないほど頭の悪い人はそうそういない」とまで思っていた。そういった価値観はやはり学校生活における友人関係や身近なロールモデルがもたらす幻想と考えられる。

二つ目は、学校教師による「ナッジ」という側面。この概念については、経済学者のリチャード・セイラーが詳しく解説しているが、簡単に言えば、「選択を禁じることも経済的なインセンティブを大きく変えることもなく、人々の行動を予測可能な形で変えるあらゆる要素」である。選択の設計者は、押し付け的ではないソフトな形で人々をより「良い」生活が送れる方向に進ませるように自覚的に取り組んでいるのである（セイラー 2009 : 10-31）。

学校教師から「お前はぜったい（高校進学せずに）就職しろ」と言われた助平。大学進学をお勧めされなかったという電卓。学校内の進路指導において、大学進学を諦めさせるような発言がなされていることを示唆していた。もちろん、金銭的な壁という問題がまずある。学校教師は子どもたちの幸せを願い、良かれと思って意図的に大学進学を諦めさせているのであろう。しかしそこには、「大学に進学しても決して幸せにはなれない」というパターンリズム的な発想が垣間見える。学校教師の判断で、大学進学という選択肢を最初からなくしてしまう方が彼らにとって「幸せ」なのだろうか。これについての是非を問うことは本章の目的ではないため、あくまでそういった現実が存在しているということを記述するに留めておく。

#### 3-4. 「良からぬこと」へのアクセシビリティ

家庭の貧困は、子どもが非行にかかわってしまう確率を高める。阿部が紹介する北海道大学教授の岩田の調査によると、少年院生は一般の家庭の学生に比べ、夕食を家族そろって食べる率が極端に低く、ひとりで食べたり、家族以外と食べることが多い。また、家族に暴力を振るわれることが多く、将来の職業の希望も少ないという（阿部 2008 : 14-15）。

外見上も、性格的にも、「ヤンキー」や「不良」といったイメージを抱かせることがなかったふれあい館の子どもたち。しかし、彼らの言葉からは若者の「非行」（端的に言えば違法行為）と取れる発言がしばしば零れ出た。顕著なのが、未成年の飲酒と喫煙だ。それらに触れる場所から、彼らの身近に潜むリスクをたどってみよう。

##### ・親や家庭にあるリスク

2016年3月16日、助平：お母さんの友達（具体的に言うと、妹の友達のお母さん）にお酒を飲まされたという話。

2017年4月11日、おにぎり：両親ともにタバコ。

##### ・学校生活にあるリスク

2016年1月31日、公太：昼間から警察に荷物検査をされた話や、友達がいつもお酒を飲ん

### でいる話

2016年3月16日、公太：学校の遠足に行った後、川崎駅近くのカラオケでオールした。店側が中学生だけのオールを許してしまうこと自体びっくりだが、お酒を持ち込むことも黙認されているようで、友達が飲みすぎて寝ゲ口を吐いたと話していた。

2016年3月16日、公太：「みーんな吸ってる。クラスの半数以上は吸ってるでしょ」

#### ・「先輩」の存在

2016年6月30日、慧：中1の野球部時代に先輩と喧嘩して殴ったことがあるというエピソードを話していた。「ちょっと早く産まれたくらいで偉そうにしているのがうざかった」

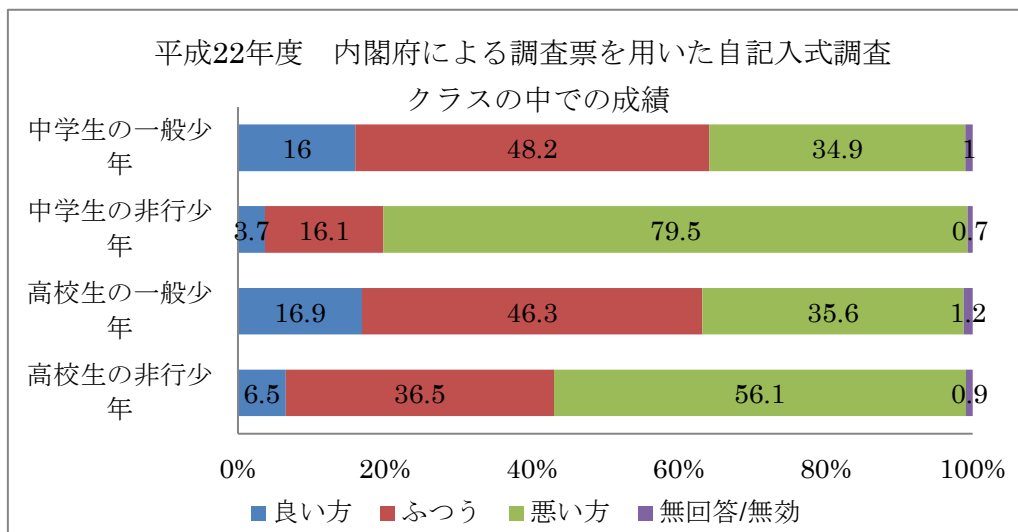
2017年3月23日、おにぎり：年上の友人にバシリにされ万引き。「ああいう年上の奴らにはね、バックにもっとでかい奴らがついてるから。逆らわない方がいい」公園にいた話。

2017年5月26日、助平：当時「悪い先輩」とつるんでいて、その時先輩に「吸う？」と聞かれ、なんとなく吸ってしまった

2017年8月10日、徹：「大師は“ヤカラ”が多い」ということを少し気にしていた。「そういう人苦手？」と聞いたら、「友達にもそういう人いますし、全然仲良いで喋るんですけど、“良からぬこと”をしてる時は関わらないです」と言っていた。“良からぬこと”を具体的に聞いたらやはり「タバコを吸っている」という話が出てきた。

以上に見られるように、学校、家庭、部活等を通じた先輩の関係性の中で、少なからず違法行為につながる機会と接触する機会が多いことが読み取れる。子どもの成績と非行問題が相関関係にあることも決して無視できない。





(出典：<http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/hikou4/gaiyou/gaiyou.html>)

### 3-5. 考察

以上を示してきたものは、あくまで桜本を巡る現実を理解しやすくするためにやむなく分類したものであって、そのすべては複雑に絡み合っている。社会的排除について、タニア・バーカードらは、過去の人的資本（遺伝的なもの、子ども時代の環境、教育）、物理的資本（土地住宅など）、金融資本（資産と負債）からの影響が、現在の選択や制約に影響し、それが個人レベルからグローバル・レベルまでの各段階に影響を与えて、それぞれの段階（岩田 2008：27-28）での結果をもたらし、再び影響要因になっていく、というプロセスを示した。岩田正美はこれに加え、排除された人々が特定の場所に集められ、そこが排除された空間として意味づけられていく空間的排除の側面と、福祉国家の諸制度との関係の中で特定の人々が制度から排除される、あるいは制度それ自体が排除を生み出す側面に注目する必要性を論じた（岩田 2008：28-32）。桜本という地もまた、戦後の社会保障政策や、京浜工業地帯に隣接しているという地理的背景故に、空間的に排除されている地域である。その空間的な排除が「良好」な社会的資本の不足に起因しており、その帰結は再び影響要因となって貧困を再生産していくプロセスへと組み込まれている、と本章をまとめることができそうである。つまり、桜本の子どもの多くは、生まれながらにして不利な家庭や学校環境に置かれており、それが彼らの自己実現の選択肢や可能性を狭めていて、その結果として顕著な自己肯定感の低さが露呈しているのである。

社会学では貧困や差別によって経済社会的に不安定になる状況を「vulnerable」と表現することがある。ヴァルネラビリティとは、心理的に「傷つきやすい」という個人的な精神状態の問題だけではなく、社会構造の問題でもあるということである。ヴァルネラブル（不安定）な社会状況に置かれた人々が、ヴァルネラブルな（傷つきやすい）精神状態に追い込まれやすくなるという連関に注目する必要がある。個人の精神状態としての「傷つきや

すさ」は、個人的な状況であると同時に、社会的な条件としての「不安定さ」のもとで構築され、人々に内面化されるのである（塩原 2017：160）。そのためふれあい館は、このヴァルネラビリティの両側面を支援する役割を担っていると言える。では次章以降では、桜本の子どもたちにとって、ふれあい館やサードプレイスというものがどのような機能を果たしているのかを考えていこう。

#### 4. ふれあい館は桜本の貧困をどう克服しているのか

##### 4-1. 学習支援としての役割

現代の資本主義経済社会において、経済社会的に安定する（地位や権利、財産を獲得すること）ことと、一個人として高い生産性を持つことは密接に関係している。そしてそのために、高学歴を得たり、専門知識を身に着けたりすることが必要で、中高生にとって最も確実なことは、勉強や大学進学がその一番の近道であるということ。簡単に言ってしまえば、この社会で「役立つ」個人となるために彼らに必要な支援は（パターナリズム的になるが）学習面や進路面での支援だという認識は当然のこととして理解できる。ふれあい館が提供しているのは、単に勉強を教えるというだけではない。前章に沿って考えるならば、①勉強の必要性を感じさせる存在との出会い、②勉強面での自信の獲得、③学校で習ったことのフォローアップ、④大学進学に対するネガティブなイメージの払拭、⑤「良識」ある大人との出会い、などといった資本を提供する場という意味で、重要な役割を果たしているのである。しかし、長い歴史の中で積み上げられた不利は重く、週 2 日、合計 4 時間の学習サポートでは限界があったことも、支援者の立場として認めておく。

##### 4-2. サードプレイスとしての役割

レイ・オルデンバーグによれば、くつろいだ充実の日常生活を送るには、以下に挙げる三つの経験の領域のバランスがとれていなければならない。第一に家庭。第二に報酬をとまなうか生産的な場。（先ほどの前提でいえば、中高生の場合は学校がそれにあたるだろう。）そして第三に広く社交的な、コミュニティの基盤を提供するとともにそのコミュニティを謳歌する場。こうした人間の経験の各領域は、それ相応の交通やつながりの上に成り立っている。各領域が、物理的に隔たった独特な場所をもっている。そして各領域が、他から独立した自律性を持っていなければならない（オルデンバーグ 2013 : 57）。そしてオルデンバーグはこの第三の場をサードプレイスと称し、それがそのままタイトルとなっている自身の著書では、「サードプレイスとは、家庭と仕事の領域を超えた個々人の、定期的で自発的でインフォーマルな、お楽しみの集いのために場を提供する、さまざまな公共の場所の総称である。」と定義した（オルデンバーグ 2013 : 59）。この本の解説でマイク・モラスキーは、日本独自のサードプレイスの在り方を考察するうえで、「とりたてて行く必要がない」、「いつでも立ち寄って、帰りたいと思ったらいつでも帰れる」という基準に加え、「その場所が提供している品物やサービスとは別の目的のために行く」という点が重要であると付け加えている（オルデンバーグ 2013 : 479）。

2016年10月20日、公太が祭りの楽しさを語ってくれた。2017年3月2日には大魔神が、銭湯で見知らぬおじいちゃんと話すのが楽しいと語っている。これらは、オルデンバーグがサードプレイスとして期待していたものにかなり近いかもしれない。また健さんは、

本当に支援すべき子どもは公園にいることが多いことを語ってくれた。その証拠と思わしきエピソードを2017年3月27日のおにぎり証言している。具体的なエピソードとしては出てこなかったが、スケートボードをやっていると話し、普段からストリートブランドの服をまっとうして、友達とどこかへ遊びに行ってしまう慧もまた、学校でも家庭でもないどこかを居場所としていることがよく伝わってくる。

居場所については、以下のような成立要件があると言われている。第一に、個人が主体的で歪みのないアイデンティティを形成する（自己実現する）ための前提として、その場を共有する人々が互いに他者の人間としての尊厳に対する心理的配慮（ケア）をしている場所。「居たい（居たくなる）場所」。第二に、ある個人がその場を共有する他者と対等な立場で、そこで営まれる人間関係に参加することが認められている「居てもよい場所」。第三に、その場所のあり方を決める政治的討議への参画の強要や、他者の心理的状況に対する積極的な介入を必ずしも求められない「居心地の良い場所」。この「居てもよい／居たい／居心地のよい」場所が居場所である（塩原 2017 : 92-94）。

桜本の子どもたちは既述したように、勉強面で平等な機会を与えられているとは言い難いことが多く、それゆえ学校を居場所とできないことが多い。それでいて家庭内では、一人親世帯であったり、多くの兄弟を抱えていたり、心理的配慮が十分になされていない場合がある。青砥恭は、川崎で少年が亡くなった事件について、「学校や家庭のなかに居場所をもたない境遇の若者たちが、能力主義競争のなかで強者と弱者という上下関係にならされ、暴力的な行動でしか自分のアイデンティティを示せなかった若者たちの事件」と記述した（青砥 2015 : 173）。2017年1月26日の輝さんの質問（「学校と家と遊び場、どれが嫌だ？」）には、三つの経験の領域で著しく「居たくない場所」がないかを探る質問があったといえよう。

私がふれあい館で接してきた子どもたちの中では、ふれあい館を重要な居場所と位置付けている子どもは少なかった。（著しい社会的排除に置かれているマイケルは例外だが、ここでの言及は避ける。）それは、学校生活における友人関係が十分に居場所としての機能を果たしていたからだと考えられる。しかし、その友人関係、「良からぬ」先輩たちとの関係性が、時として彼らの人生の幅を狭めてしまう可能性を考えたとき、「意味のある大人」の目が届くふれあい館がその代替的なサードプレイスとして機能していくことは極めて重要かもしれない。

能力主義競争社会の中で、「弱者」とされてしまった若者が、代替的なアイデンティティを求めている根拠として、興味深い文化がある。以下では、ヒップホップ文化を例にとり、サードプレイスの重要性について考えてみたい。

## 5. サードプレイスの重要性

### 5-1. サードプレイスとしてのヒップホップ文化

高校生の電卓のほか、ふれあい館内だけでも様々な場面で私はラップと出会うことがあった。ラップを通じた表現の場というのは、子どもたちのサードプレイスの一例として興味深い。ラップは、ブレイクダンス、DJ、グラフィティと並ぶヒップホップ文化の四要素の一つである（長谷川・大和田 2011：39）。ヒップホップ文化は、「ゲッターの奥深く、どうしようもない貧困と暴力、犯罪によって特徴づけられる場所」に住む、アフリカ系、ヒスパニック系などのエスニック・マイノリティの若者たちによって実践されるコミュニティ文化であり、彼ら彼女らの「代替的なアイデンティティ形成、社会的地位の源泉」として立ち現れたという（木本 2009：20）。

本場、合衆国においてそれは、希望を失った若者の本音、アイデンティティであり、自分たちを切り捨てる世界に抵抗する手段（S・クレイグ・ワトキンス 2008）であり、保守的な文化や既存の体制に抵抗するムーブメントとして、その地位や評判を確立してきた。「ヒップホップは黒人の歴史の改革運動」とも言われ、合衆国における抑圧された「マイノリティの人々が作り上げた」ものであるため、「人種のアツれきを肌で感じる事が少ない日本」のラップでは「空虚なモラル」が語られていると批判されている。

しかし、貧困の差や人種差別といったあからさまな社会的アツれきだけが抑圧を生み出すとは限らない。日本ならではの抑圧構造は存在し、社会に疎外されている感じ、自分の居場所を探し求めている「精神的マイノリティ」層もまた、潜在的多数として、確実に存在していて、日本におけるヒップホップ・シーンが、こうした層に対するある種の受け皿として機能しているという（木本 2009：63）。

とあるNHKのニュース番組の特集（2016年2月22日放送）が取り上げていたのは、「川崎サイファー」だ。「サイファー」とは、ラッパー、ビートボックスが主に路上等でセッションを行う際に自然発生的に出来る人だかり、もしくはそれを目的とした集会のことである<sup>1</sup>。川崎サイファーは、毎週土曜日の夜8時頃にJR川崎駅のほど近くで行われるサイファーで、その参加者は経歴も年齢もばらばらであり、様々なバックグラウンドをもつ若者たちが居場所を求めて集まっている。

2016年12月10日、ヨドバシカメラ・マルチメディア川崎ルフロン前にて、主催者のZEROさんにお話を伺った。川崎サイファーはもともと後輩が始めた活動で、その後輩が仕事などの関係で続けられなくなったため、それを引き継ぐ形で活動を続けているのだそう。ZEROさんはTwitterなどのSNSで告知しているだけで、基本的には自然発生的に人が集まる。ZEROさん自身は川崎出身の川崎育ち。この地域には「言える関係も言えない関係も色々な繋がりがある」と話した。お兄さんの影響でラップを始めたのは3年前だ

<sup>1</sup> <http://d.hatena.ne.jp/keyword/%A5%B5%A5%A4%A5%D5%A5%A1%A1%BC>

そうだ。

川崎サイファーの様子を見学させていただいた。2016年12月10日、気温が5度を下回る寒い中、19時半前にはすでに7、8人の若者が円になってサイファーを行っていた。年代は中学生から20代半ばまでといったところか。必ずしも全員が顔見知りというわけではない。スキルもバラバラ。上級者と思わしき者もいれば、素人目に見てもラップを始めたばかりだとわかる者もいた。隣の人がラップした内容に答える形でラップをしているようだ。私のような見学者も何人かおり、特にラップを強要されることはなければ、追い払われるということもない。その空間にどんな人間がいても、あまり気にしていない様子だ。いぶかしげに覗き込んでくる周りの視線も気にしない。裏を返せば、誰に対しても無関心なのかもしれない。この空間に入り込むための名刺のようなものがラップなのだ。ラップをしていないものは存在していないに等しい。サイファーのなかで興味深かったのは、ZEROさんへのリスペクトをラップする少年が多くいたことだ。サイファーの中でも卓越したスキルを持つラッパーが彼らの憧れとなっていることがよく伝わってきた。

この現場での観察も踏まえて、川崎という地域でラップが盛んになっている理由は、以下のようなものがあると考えた。

- ・平等であること

ラップはお金がかからない。貧困家庭に育つ子どもたちでも気軽に始められる。バンドで演奏する音楽のように、ギターのような高い楽器を購入する必要がなければ、スタジオを借りて練習する必要もない。音楽の知識の必要ない。ビートを流す機械があればいい。

- ・地域性

今でこそラップという娯楽はメディアでの露出が多くなり、それを見てラップを始めたという者も多いかもしれない。しかし、実際にラップをしている若者たちからよく耳にするのは、兄弟や友達、先輩がきっかけで始めたというものだ。地元で根差した密接なコミュニティを持つ地域ほど、ラップは栄えやすいという傾向にある。それは、先述した「良からぬことへのアクセシビリティ」という点とも結びついている。ラップは自作自演に対する強いこだわりを持つ。地域性を重視し、自らの生まれ育った境遇を自慢し合うという特徴がある。川崎が生んだラップグループ、BAD HOPのメンバーたちは、自分たちの生まれた川崎市南部の工業地帯を中心とする地域を、ヒップホップが生まれた治安の悪い地域、サウスブロンクスなどと重ね合わせ、「サウスサイド川崎」とも呼んだ<sup>2</sup>。彼らにとって、自分たちの暮らす地域の治安の悪さを「誇り」に変えてくれるのがヒップホップ文化というわけだ。

- ・ロールモデル

---

<sup>2</sup> [http://www.premiumcyzo.com/modules/member/2016/01/post\\_6468/](http://www.premiumcyzo.com/modules/member/2016/01/post_6468/)

BAD HOP のメンバーの一人、YZERR はこう言う。「川崎のこのひどい環境から抜け出す手段は、これまで、ヤクザになるか、職人になるか、捕まるしかなかった。そこにもうひとつ、ラッパーになるっていう選択肢をつくれたかなって」<sup>3</sup>。BAD HOP はメンバー全員が川崎出身の若者で、なかでもリーダー格の T-Pablow は高校生ラップ選手権の優勝を経て、フリースタイルダンジョンという地上波の番組<sup>4</sup>にレギュラー出演するなど、その人気は絶大である。川崎の恵まれない家庭に生まれ育ち、ラップと出会うことで人生に転機が訪れ、「成功」を収めた数少ないロールモデルである。彼らに憧れ、ラッパーという夢を志す若者が川崎に多くいることは決して不思議なことではない。

## 5-2. サードプレイスが重要な「居場所」である理由

ラップを始めとするヒップホップ文化の説明が長くなってしまったが、それではなぜ、このサードプレイスが重要なのか。川崎の若者がヒップホップ文化に求めているものも踏まえて、私は少なくとも以下の三つの理由があると思う。

### ・経済社会からの解放

いわゆる現実逃避。学生でいえば勉強や将来に対する不安、社会人であれば仕事から解放される至福の時間を提供しているのがサードプレイスである。

### ・人間関係の再編

オルデンバーグはサードプレイスのもたらす恩恵について、ストレス源からの逃避や息抜きをはるかに超えた意味がある主張している。その重要な側面として、「人を平等にする (leveling)」ことがある。人を平等にするが故、サードプレイスは、人付き合いの可能性を広げる働きがあるという (オルデンバーグ 2013 : 69-73)。実際、BAD HOP のメンバーはラップを通じて日本語ラップの重鎮 ZEEBRA などと出会い、地元のコミュニティのしがらみから脱したことを告白している<sup>5</sup>。そこでしか出会えない多様な人間と出会うことで地域的な社会的排除を脱すること、自らが内面化していた価値観が変わることなどが、サードプレイスの重要性の側面の一つと考える。

### ・「弱さ」を含めた人間性の承認

ヒップホップ文化では、自らの不幸な境遇をラップにすることが多い。後の章で詳しく言及するが、自己責任規範の影響力が大きい言説空間において、「弱い私」は受け入れてもらえない。その結果行き場を失った私の自己承認欲求を満たす役割があると思われる。

<sup>3</sup> [http://www.premiumcyzo.com/modules/member/2015/12/post\\_6375/](http://www.premiumcyzo.com/modules/member/2015/12/post_6375/)

<sup>4</sup> 2015年9月30日～2018年12月14日現在、テレビ朝日にて、毎週水曜 1:26 - 1:56 に放送されている。番組ホームページ : <http://www.tv-asahi.co.jp/freestyledungeon/>

<sup>5</sup> <https://www.m-on-music.jp/0000071518/>

### 5-3. サードプレイスのジレンマ

ここまで述べた役割を踏まえると、一つの（議論尽くされてきた）ジレンマが生じる。サードプレイスは、競争社会に復帰するための一時的な休養所でしかないのか、ということ。効率性が謳われる現代社会において、サードプレイスでの時間は、効率性のない、「無駄」な時間となってしまうのか、ということだ。

ふれあい館では、勉強という目的を持たせた瞬間に、ふれあい館が居場所としての機能を失ってしまうケースがよく見られた。公太は特に顕著だったが、勉強をするための「塾」ならそこは居場所にはならない、ということがこれまでのフィールドワークを通じてよく伝わってきた。学習支援としての側面を失わないようにしつつも、サードプレイスとして子どもたちの居場所であり続けることはできないのか。これは支援者の立場として何度も立ちはだかった壁である。既述したように、社会的排除はきわめて「個別的」な様相をもっており、一人ひとりに個別なニーズが存在していて、それぞれに対応した支援を行わなければならない。だが、その柔軟性、学習支援と居場所作りの二重性をもって対応できることこそが、ふれあい館の持つ大きな役割であるとも言える。

また、桜本の子どもたちが必要とする要素のなかで、学習支援と居場所が提供しているものに共通する社会的資本が一つだけあった。それは「出会い」だ。桜本は社会的排除に置かれがちな地域であるからこそ、違う価値観やバックグラウンドを持つ人との出会いは、極めて重要な資本になる。その出会いを促す力がサードプレイスにはあるという点で、サードプレイスは重要なものと言える。

### 5-4. 私たちもまた当事者である

マイノリティに位置づけられる人々に限らず、人間は誰でも何らかの「傷つきやすさ」を抱えているのが常である。哲学者の花崎によれば、関係における加害・被害のさまざまな形態が、現代社会に骨がらみの、不可避な現象として存在している。私たちは、好むと好まざるとにかかわらず、ますます多面的で重層的な関係の中に生きざるをえなくなっている。それが各人の内面に侵蝕して、現代人は、かつてよりずっと精神的にもろくて、傷つきやすくなっているのだという（花崎 2001 : 352-353）。今日の日本社会において、人が抱える「傷つきやすさ」は原則としてその人の個人的問題であり、したがって「自己責任」で克服しなければならないという価値規範が大きな影響力を持っている。そこではハージが「わたしは強いから、自分の傷つきやすさを他者の目から隠し、他者がその傷つきやすさを利用して私をやっつけないようにすることができるのだ」と表現したような、強さのあり方が望ましいとされる（ハージ 2008 : 106-107）。こうした「強さ」のイメージは、他者に自分の「傷つきやすさ」を開示し、共感に訴えようとする主張に対して発せられる「それは甘えだ」という非難としても表現される。新自由主義が優勢となり自己責任規範の影響力が増大する社会においては、そのような他者への「甘え」はしばしば「弱さ」として表象される。自己責任規範が支配的な言語空間において「弱者」は尊重され力づけられる



べき存在ではなく、軽蔑され無視されるべき存在としても表象される(塩原 2017:160-166)。このような価値規範を内面化している人は、その度合いが強ければ強いほど、ひたすらに「強く」振る舞うことを選ぶ。その結果、「弱い私」は居場所を失う。同時に、「強く」振る舞うことができない、身体的にも精神的にも限界と感じたその時、激しい自己嫌悪に陥ることは容易に想像できる。

自傷行為を繰り返す人を丁寧に診療し、多くの臨床研究を行ってきた松本俊彦は、自傷行為の理由のうち最も多いのは、苦痛やこころの痛みへの対処であることを明らかにし、その行為は、安心して信頼できる誰かに自分の思いを伝えることができなかつた、その生い立ちを反映するものだと述べている(河西 2009:22)。

私の身近な慶應義塾大学の友人でも、私の認識している限りにおいて、一人の自殺既遂者、二人の自殺未遂者がいる。繰り返し主張してきたように、貧困を始めとする社会的マイノリティと位置付けられる人は、その環境故、精神的にも傷つけられやすい可能性が高いということは事実である。しかし、そうした社会的不利にかかわらず、誰しも傷つきやすさを抱えているのが常である。「甘えられない状態」というのは、実はひどく「弱い」のである。そういう意味において、自己責任論が影響力をもつ社会の分断線は、「強い人／弱い人」というよりも、「甘えられる人／甘えられない人」の間に引かれているのではないか。私は今、「甘えられる／甘えられない」の二項対立のように表現してしまったが、実際には明確な分断線があるわけではなく、開示できず抱え込んだ「弱さ」の分量によって位置が変わるスペクトルのようなものとイメージしている。そして、社会的マイノリティに位置づけられる人は、その絶対量がどうしても多く、極地に追いやられてしまいがちである。

だが、「強さ」の基準はその社会の価値基準によっても大きく異なる。サイファー内ではラップの上手さがその人の価値を決めていたように、サードプレイスにおいても強さ、弱さは存在する。人と人が出会う以上、そこには社会が存在し、そこに社会がある以上、「目的」から完全に自由になることはあり得ず、その目的に則った「強さ」がどうしても存在してしまう。(オルデンバーグが主張していたように、サードプレイスの主な活動が会話だとするならば(オルデンバーグ 2013:74-82)、会話の上手い人、話の面白い人というのが、どうしてもその場所での強さになる。)そしてそれは、私たちが必ずしも支援者、マジョリティ側の人間に安住しないことを意味するのではないか。

##### 5-5. 「第2のセカンドプレイス」という可能性

本論文では、私のふれあい館での支援活動の軌跡を、時系列に沿ってなるべく詳細に記述することを心掛けた。その目的の一つに、支援者と当事者の立場を行きかう私自身の変化を一つの重要な観察材料としたいという意図があった。フィールドノートは現場の記録であると同時に、私自身の感情の記録だ。

自分の話に字数を割くつもりはないが、果たして、ふれあい館は私自身にとって重要な「サードプレイス」であつたらうか。残念ながら、オルデンバーグの書いた定義には当

てはまらない。あくまで学習サポート（同時にフィールドワーク）は「仕事」であったし、交通の便という面では、はっきり言って行くのが面倒くさい場所であった。

ただ一つ言えるのは、2年近くにわたって行ってきた学習サポートとフィールドノート報告、その熱量たるや、明らかに「卒業までに必要な単位を取るため」という目的以上のものがそこにはあったということだ。オルデンバーグは第一の場を家庭、第二の場を生産的な仕事場、第三の場をインフォーマルな非生産的な場といった形で日常生活の経験領域を分類し、その三つ目を「サードプレイス」と称した。これに従って二つ目の経験領域を「セカンドプレイス」と呼ぶことにするならば、ふれあい館は私にとって、サードプレイスというよりは「第2のセカンドプレイス」であった。それでもそこは、第1のセカンドプレイス（勉強やサークル活動、ひいては就職活動）では得られなかった自信や自己承認欲求獲得の場であった。また学習支援の経験が、教育系の企業への就職を選択するきっかけになったり、就職活動では定番となっている「学生時代に頑張ったこと」を語るエピソードになったりするなど、自らの進路選択に影響を及ぼす経済社会的な価値があったことにも注目したい。第1のセカンドプレイスでは「弱さ」とされていた（あるいは、自分自身がそう思い込んでいた）私の一部分が、第2のセカンドプレイスでは「強さ」となり、それを受け入れてもらえる経験が得られた。全部とは言えないまでも、そうやって少しずつ、資本主義社会の中で「弱さ」を開示していけないものだろうか。本論文のやり方に沿ってフィールドの経験を還元するならば、ボランティアへのやりがいや垣間見せた大魔神。学校は楽しくないけど、部活は楽しいと語ったドレイク。ふれあい館の学習サポートにサポーターとして参加する電卓と健三。勉強とは違った形で「強み」を発揮する彼らが、こうした場で将来に対して前向きになるきっかけを得ることを願ってやまない。

## 6. おわりに

自己責任論の影響が増す社会。それに対する疑問を投げかけたい立場ではあるが、社会福祉のネットワークがますます縮小していくことはもはや避けられない、現実に行っている出来事として受け入れなければならない。そんな中で、現代社会のスピード感を緩めない形で、人の心にゆとりを与える術はないだろうか、というのが本論文で（強引ではあるが）捻り出したかった結論であった。

ここで、本論文を短くまとめよう。桜本のような貧困が集中する地域の子どもたちは、競争社会の現代において、比較的不利な生活環境に置かれている。そのため彼らは経済的にも心理的にも「ヴァルネラブル」な状態に追い込まれやすくなり、それは「弱さ」として表出している。競争社会がスピード感を増し、福祉ネットワークが縮小していく中では、弱さを露呈できる「居場所」はますます減っていく。それは、貧困を始めとした社会的マイノリティに位置づけられる人に限った話ではない。現代社会にいる全ての人が「甘える」ことを許されなくなっていくのである。そんな中で個人がとれる戦略の一つが、「強さ」の軸を複数持つということ。換言すれば、多様な生産性と、それを許容する多様な生活空間

を持つべきではないかということだ。多様な生産活動に携わると言ったほうが分かりやすいかもしれない。実現可能性はともかくとして、この 2 年間の「居場所探し」活動で導き出した私の答えである。

フィールドノートに関しては、本論文の問題意識に沿ってその一部しか参照していないが、問題意識を変えればまた違ったものが見えてくる貴重なデータであり、余計な記録などない、という結論に至って、巻末資料という形でそのすべてを記載することとした。

大学生活という居場所競争の社会。大学ダンスサークル、塩原良和研究会、川崎市ふれあい館、アルバイト先の喫茶まりも、ストリートダンスを通じたコミュニティ。その時々、様々な居場所が私の心にゆとりとほんのちょっとの自信を与えてくれた。この 4 年間のすべての出会いに感謝の思いを込めて。

#### 参考文献・資料

- 阿部彩,2008,『子供の貧困——日本の不公平を考える』,岩波新書.
- 青砥恭+さいたまユースサポートネット,2015,『若者の貧困・居場所・セカンドチャンス』,太郎次郎社エディタス.
- 岩田正美,2008,『社会的排除——参加の欠如・不確かな帰属』,有斐閣.
- レイ・オルデンバーグ (著)・忠平美幸 (訳)・マイク・モラスキー (解説),2013,『サードプレイス——コミュニティの核になる「とびきり居心地よい場所」』,みすず書房.
- 河西千秋,2009,『自殺予防学』,新潮選書.
- 木本玲一,2009,『グローバリゼーションと音楽文化——日本のラップ・ミュージック (双書音楽文化の現在)』,勁草書房.
- 塩原良和,2017,『分断と対話の社会学——グローバル時代を生きるための想像力』,慶應義塾大学出版会.
- 塩原良和・山田貴夫・仲山紘史・原千代子・金迅野,2012,『だれもが力いっぱい学べるために——青丘社「学習サポート事業」の現状と課題』,社会福祉法人青丘社.
- 数理社会学会,2014,『社会学入門—社会をモデルでよむ—』,朝倉書店.
- リチャード・セイラー・キャス・サンスティーン (著)・遠藤真美 (訳),2009,『行動経済学——健康、富、幸福への聡明な選択』,日経 BP 社.
- ガーサン・ハージ (著)・塩原良和 (訳),2008,『希望の分配メカニズム——パラノイア・ナショナリズム批判』,御茶の水書房.
- 長谷川町蔵・大和田俊之,2011,『文化系のためのヒップホップ入門』,アルテスパブリッシング.
- 花崎皋平,2001,『増補 アイデンティティと共生の哲学』,平凡社.
- 平沢和司,2014,『格差の社会学入門——学歴と階層から考える』,北海道大学出版会.
- S・クレイグ・ワトキンス (著)・菊池淳子 (翻訳),2008,『ヒップホップはアメリカを変えたか?——もうひとつのカルチュラル・スタディーズ』,フィルムアート社.

2008、『だれもが力いっぱい生きていくために——川崎市ふれあい館 20 周年事業報告書（’88～’07）』,川崎市ふれあい館・桜本こども文化センター.

2010、『川崎市次世代育成支援対策行動計画 川崎子ども「夢と未来」プラン（後期計画）』,川崎市.

2016、『川崎市外国人市民意識実態調査（インタビュー調査）報告書』,川崎市.

<http://d.hatena.ne.jp/keyword/%A5%B5%A5%A4%A5%D5%A5%A1%A1%BC>

[http://www.city.kawasaki.jp/450/cmsfiles/contents/0000051/51502/H250823\\_s2.pdf#search=%27%E5%8C%BA%E5%88%A5%E5%A4%96%E5%9B%BD%E4%BA%BA%E7%99%BB%E9%8C%B2%E4%BA%BA%E5%8F%A3+%E5%B7%9D%E5%B4%8E%E5%B8%82%E6%AC%A1%E4%B8%96%E4%BB%A3%E8%82%B2%E6%88%90%E6%94%AF%E6%8F%B4%27](http://www.city.kawasaki.jp/450/cmsfiles/contents/0000051/51502/H250823_s2.pdf#search=%27%E5%8C%BA%E5%88%A5%E5%A4%96%E5%9B%BD%E4%BA%BA%E7%99%BB%E9%8C%B2%E4%BA%BA%E5%8F%A3+%E5%B7%9D%E5%B4%8E%E5%B8%82%E6%AC%A1%E4%B8%96%E4%BB%A3%E8%82%B2%E6%88%90%E6%94%AF%E6%8F%B4%27)

[http://www.jil.go.jp/kokunai/statistics/kako/2016/documents/useful2016\\_21\\_p286-330.pdf](http://www.jil.go.jp/kokunai/statistics/kako/2016/documents/useful2016_21_p286-330.pdf)

<https://www.m-on-music.jp/0000071518/>

[http://www.premiumcyzo.com/modules/member/2015/12/post\\_6375/](http://www.premiumcyzo.com/modules/member/2015/12/post_6375/)

[http://www.premiumcyzo.com/modules/member/2016/01/post\\_6468/](http://www.premiumcyzo.com/modules/member/2016/01/post_6468/)

[http://www.sonylife.co.jp/company/news/29/nr\\_170425.html#sec6](http://www.sonylife.co.jp/company/news/29/nr_170425.html#sec6)

<http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/hikou4/gaiyou/gaiyou.html>